

令和5年度 大分大学学校推薦型選抜入試問題

小 論 文

(福祉健康科学部)

福祉健康科学科 社会福祉実践コース

解答時間 60分 (9時00分～10時00分)

配 点 100点

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること。

令和5年度
大分大学福祉健康科学部学校推薦型選抜入試問題
福祉健康科学科 社会福祉実践コース

問題 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これからの日本におけるコミュニティここではまず地域コミュニティを考えるにあたり、(中略)私は次に述べるような「地域密着人口」の増加、という視点が重要と考えている。

図4-1をご覧いただきたい。これは人口全体に占める「子どもと高齢者」の割合の変化を示したもののだが、1940年から2050年という100年強の長期トレンドで見た場合、それが比較的きれいな「U字カーブ」を描いていることがよくわかる。すなわち、人口全体に占める「子どもプラス高齢者」の割合は、戦後の高度成長期を中心に一貫して低下を続け、それが世紀の変わり目である2000年前後に「谷」を迎えるとともに増加に転じ、今後2050年に向けて今度は一貫して上昇を続ける、という大きなパターンが見て取れる。

なぜここで「子どもと高齢者」の合計に注目するのか。それは、人間のライフサイクルということを考えれば、子どもの時期と高齢の時期は、いずれも「土着性」ないし地域との関わりが強いという点が特徴的だからである。いわば子どもと高齢者は「地域密着人口」と呼べる存在である。これに対して現役世代は「カイシャ」つまり職場との関わりが圧倒的に強く、地域との関わりは薄くなりがちだ。

以上の点を併せて考えると、戦後から高度成長期をへて最近までの時代とは、「地域」との関わりが強い人々(地域密着人口)が減り続けた時代であった。しかし今後は逆に、そうした人々が一貫して増加する時代になっていく。

こうした「地域密着人口の増加」という事実に着目すれば、現役世代に比べて圧倒的に「地域で過ごす時間」が多く、自ずと地域の様々なことに関心が向く人々の群が着実かつ急速に増えていくのがこれからの時代である。

(出典：広井良典、『持続可能な医療—超高齢化時代の科学・公共性・死生観』、ちくま新書、2018年より抜粋・一部改変)

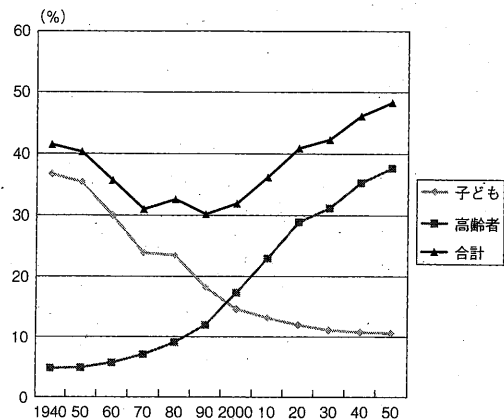


図4-1 「地域密着人口」の増加(人口全体に占める「子ども・高齢者」の割合の推移(1940-2050年))

(注) 子どもは15歳未満、高齢者は65歳以上。
(出所) 2010年までは国勢調査。2020年以降は「日本の将来推計人口」(平成29年推計)。

問 この文章で著者の指摘する「地域密着人口」の変化について説明し、それをふまえたうえで、これからの地域コミュニティのあり方について、あなたの考えを600字以内(句読点を含む)で述べなさい。